



燕石  
十種

墨水消夏錄

二輯

六

4	曾	1
6	7	9
1	6	



特  
18  
679  
16

墨水消夏錄

叙



余居京橋東邊之租房其巷曰具足街與柳街隣因以聞諸  
 老翁此地以稱者花街之遺踪也遂尋其事跡求舊記慶長  
 以來百有餘年其蹟不詳者世人不好古觀舊記猶古曆以  
 為無用之物貼屋壁糝屏障之以不傳也凡物有好則其類  
 自集諺所謂眼之所依瞳亦倚故就好事家閱裨史暨反古  
 漸正其車蹟以自娛自人觀之則無用之書乃比諸古曆然  
 是余之一癖不可針砭自好車觀之則愈乎己焉不可以無  
 也有則慰好車之眼凡物從不好者觀之則笑以為餘事天  
 下之物大抵如斯矣京橋租房再遇回祿之出示所輯錄之  
 書悉為被所奪遂移居於墨水之淺草鄉六月徂暑酣晴如  
 燬雖廢業不能空手引曉涼點螢大攄所胸臆曰題墨水消

夏錄聊備好事之据據庶幾共余同志者必補其漏乎云爾

化丑夏日

西湖外史颯識

墨水消夏錄卷之一目錄

日本橋  
本町  
屋形船  
窮屈丸  
蟋蟀丸  
幾世餅  
淺草文庫  
淺草海苔  
並木町  
專堂坊屋敷  
六地藏石燈籠  
花川戶助六考

猪牙舟  
角田川  
庵崎  
関屋の里  
橋場  
宮戸川  
兩國橋  
木母寺  
長命寺  
牛島  
弘福寺  
三圍其角祈雨

慶陽寺

道徹

日本壇

孔雀長屋

吉原新古考

庄司甚右衛門傳

京橋柳町繪畵

二枚櫛

及

媼鈍

盆燈籠

清搔 三弦傳來

墨水消夏錄卷之一

荏戸 蘭洲東秋颿著

日本橋

古一舟渡あり明治九年小舟橋をかく大坂倉の中央を日本の人江戸  
出るものききしをわつしをききしものあり橋を日本橋とあり

本町四丁目

事録今更の云沖入國以前ハ刑罰場中町目あり 沖入後ハ法堂中町あり  
旅籠町あり後今戸橋の南本戸橋西方とあり其の北あり出る處ハ法堂  
十町斗の幅ニ斗あり人更ふ移りたり又其後今戸の北極東の橋あり  
旅籠町刑罰場ありし時ハ南の沖入戸の方本戸の北流より戸ありをその時陰  
ありし水より用ひたる井之又そのころより新むしを俗に地獄橋とあり刑罰  
場より近きあり

西國橋











大庇生民於萬斯年誰施其功肅々田桃電勉從事不敢告  
勞原隰既平川流既清端我國家永以維寧

猪牙舟

吉原之通ふ二挺之舟五帝之國と云舟大工とてめてはる舟を造二挺らの船頭は五帝  
多國の舟あつて六用いさししやを室永中よらの二挺ら信望あつちよれ舟といふは  
吉舟の船頭あつ押送舟の古きといふ舟の形薬研のこととてゐて舟は舟  
つらうを舟頭といふ舟の形あつて舟の形は舟を造る今  
これを猪牙船といふ

角田川

千壽川の末あつて角田川といふ川もつけつていふ川といふ川  
こゝこゝは川と都多多くは角と是と赤鴨の大ききものもこゝを河川幸に親王  
一下の付

角田川のてふりまねづともさとの景たらしあうぬあうのそ

右の自筆を急あつて木舟守少河りまて通船殿のあつ

あつてせい我あつてこゝは多う河のあつてもこゝはあつて  
まてこれと云はれぬの玉の江戸より北と東のまて川  
これの自筆の押りのまて首を狭く將後徳とまて人無世の長清とまて  
は人のうゝ

これれこのあつてをこゝはあつて角田川京の流えり

岡本宗好の歌

流きもくはつていつる月を角田川京の流の流き

源光豊のうゝ

角田川よりいれとも干置は多うあつて水々きのり  
建保百首ふ順徳院の御制

こよひもつて流きもくはつて角田川の京の秋の月歌

尾崎



仰立寄所の山薬草と名付けらるる寺に内使ありてその寺の名を山母河と云ふ  
その名も亦もあきすしと云ふものと見ゆゆかくも命まことあつたれと云ふ  
一也ふと云ふ

牛島

津島川の東今戸村の向を云ふ牛の御社の社名牛島といふ事ありと云ふ事あり  
云は社十七八年以前といふ文四方の茅屋をその司馬ねお侍りや仰しくやらん  
甲斐もあつた一板の厚板の上ふと云ふれらるる社を云ふ事ありと云ふ事あり  
ありしうは津島川今戸宮屋も亦もあつた社も面白くよれあつた事あり  
は社古碑あり正面に新迦の像をちりはの北に貞観三年に新迦の像あり  
たつと仰今戸祠中より新迦の像をちりはの北に貞観三年に新迦の像あり  
ハ余り先師金藏翁の書又其東に源頼朝の書と云ふ事あり井上某翁の書  
瘞一碑あり

弘福寺

宇治藤原紀隆の墓は宇治藤原製文松久微義書古郡公孫の墓松崎君終  
孫因思恭建凌儀の墓橘子藤原製文并書東源林義卿の墓南宮大  
湫の墓紀徳氏孫神田河亀成の墓あり

三圍稲荷

元禄六年癸酉六月大雨して田畑漏の濕ひあつて田畑龜背の如くさけ農民これを  
怨き雨乞のまつりをしてたてた事ありと云ふ事あり廿八日雷轟高の白雲といふ人  
室井其角をともあひて舟のりして舟をちりはの北に貞観三年に新迦の像あり  
稲荷のまをいし農民の雨を乞ふ事ありと云ふ事あり白雲これふ戯ていふ人  
雨乞いせし事ありと云ふ事あり農民其角をとりてたてた稲荷といふ事あり  
といふ事ありと云ふ事あり稲荷といふ事あり稲荷といふ事あり稲荷といふ事あり  
おろかし

ゆきまや田をまのりり此神ありげ

それより夕方向ひて筑波より雷ありて雨を降すを慮るる事ありては白  
を角り志流今尚河原草和三年庚寅六月二井氏の徒多の文をよめてる事を  
記して碑をたつ又友人寝惚子の程終ふ

鳥居半出大川端遙指三圍稻荷壇蘆葉外未盛洗鯉蒲  
焼食盡割長鰻葛西号掛太郎鼻晋子鯉句番百姓肝  
向晚船頭呼不起屋根舟内只聞軒

荳陽寺

昔もて花あふりつのはらうはる川の末今も移さる伊丹右衛門采女男もまね  
對死せしむ委しむもらぶものゝうらみあふりて伊丹右衛門采女男もまね  
昔は糸秋の月を戯まて詠しともゆのめしむる

舟川采女年十八辭世の

とらふもふりて我のこころのいそぎて越人死出の心路を

道徹

菱川師宣の意の道引ふ云堤のうらみとてまゝ居りてをうらみと問ふさりし時曆  
の比より道徹といひし心者世をわらうとも思ひらんあまもなきふまふ尾をあ人結ひて  
さうが二六時申ふくの声たもむ結あうさうふゆめとささひしとふさるのさか  
ふ乃徹うちり或申ふ淋しきもの乃徹か目の声と聞今もるよ作がの小唄ふ  
そのちぐら道徹とてふもはちあうとてか按ふさ付門か刑罪坊之彼罪人仁果得  
眼のうらみあむ取の念外しりし又平河刑罪坊の婦あふ好さる寺を西方ちとハ  
うかきしそ人皆道徹といふの乃とて墓の用山念登の墓とあふりて塔の上ふ  
をさたて石像あり今も傳ふ尋ふ没年詳あははちふさ尾の遺物あり

高尾襟掛地藏

銅佛主像一寸八ト尾ち像入一佛あり

同位碑 法号轉善妙身信女

同系持羽子板

右羽子板若背とも小総重地持板よりハ糖何の中ハ板あり墨府跡あり

此道人の  
世傳る伊豆侯とあり  
の船中へて尾をたひかり  
あふりていつてさう  
仙居候傳をとりてま  
とていひしとて百  
之そのことを漢皇して故  
之傳の傳名をさせ將軍家  
の首尾をあらうふあん  
とて傳の運名とて伝  
の傳ふらうとてし  
その傳を三世三川白蓮とて  
足利教皇の人取竹の傳の故  
を付あふり傳をさせ故  
傳を記させしつてすま  
すしとて通来し尾の首か  
がたしとて取代持見  
をのあも地ふちのさ  
をたて和名の木あう人  
をきくしてをの男女  
を伝をたてしつて  
とて世傳るあり

有るにふね葉の紋あり事ふ楽の美なりたる治あり中の金具は海ふつ  
し垂掬ふ事なるものあり事ふ事なる字の字を以てこれにふねの形あり  
ふねより蓋春日時とひひ一各々の形あり  
又ふふふ尾の墓なり碑面地をわらふ紅葉の紋あり古く轉答妙身信女万  
治三庚子年三月廿五日左ふ 言風なりともふふふの形あり  
のふふふふ葉の本は是は海ふ事なる墓ありふねを葉に事ふ事なる  
年月もあふ事なり妻春彦院の事なり事なる

日本堤

明暦三年大火故遊女町を橋を時比堤を築ふ法大長を伴舟速ふ出舟なる由日本  
諸大名の繪之とて日本堤と名付美川所宜志の舟の上船或船ははきと大い  
る堤あり日本の法大長と名付明暦年中ふと事なる右日本堤とありしと又事  
頃舟賃かゝるの事なり

定

一 小石川水道橋牛込吉祥寺より合流の事舟賃

但 二丁あり 三か五丁  
一丁あり 二か

一 浅草橋より合流の事舟賃

二か 但 二丁あり

一 新橋より合流の事

三か五丁あり 二か

一 新橋本橋所より合流の事舟賃又の事舟賃より合流の事

四か五丁あり 二か

但 時より三かあり合流

一 舟の形より合流の事舟賃又の事舟賃

船賃の事

一 舟の形より合流の事舟賃

一 舟の形より合流の事舟賃













二朱判やとくがよもと男

山牛

小便も見り巧も 五月のれ

迷牛

ほろきん 喰い子をかしらり

每牛

幾別をわらも 鹿もその履うか

半牛

何となく冬秋澤を びりきり

送牛

さめしものふ 尻を尻や 舌の舌

光牛

りふ又 湯燗のともいふ 志られうか

嬪 純

洞房語 元文二年 宮中より 吉原へけりしもの 以江戸町 二月 仁徳ら  
とりの 湯燗 煮ききうを 一人の 弁當 うちその 價銀 五つふ 煮ききう 是を  
甘布のり 煮ききう 煮ききう 嬪純と 嬪純の 嬪純の 嬪純の 嬪純の 嬪純の  
ふぶき 煮ききう 煮ききう 煮ききう 煮ききう 煮ききう 煮ききう 煮ききう

血燈籠

音系 角河 中万字 玉菊 進薦 上りけり 玉菊 その 時の名 ぬき 大徳を ころみ 遠く 酒  
のつら 病を ぬき ぬき 高保 十一年 二月 在る 万字 ぬき 感と ぬき 善と ぬき 善  
新と ぬき 善と ぬき 善と ぬき 善と ぬき 善と ぬき 善と ぬき 善と ぬき 善と ぬき 善と  
軒付と ぬき 善と ぬき 善と ぬき 善と ぬき 善と ぬき 善と ぬき 善と ぬき 善と ぬき 善と  
忌の時 十寸 尺文 山彦 源氏 二人 万字 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
し ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

如左人  
月とを拾ひの紙の  
さうとをり  
か比 登の  
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき



墨水消夏錄卷之二目錄

黨連坊

諷 未

鏡池 永女塚

道沖庵

福聚院

法眼寺

勝運寺

春慶院 高尾墓

金龍山

茂睦碑 并傳

觀音堂

奈良茶飯

二拾軒茶屋  
 久米平内石像  
 柿本祠  
 業平墳  
 嬉の森首尾乃松  
 心中石  
 東江寺 百里居士 墓碑  
 惇信墓  
 梅 莊  
 吾妻森  
 大雲寺 猿若傳

墨水消夏録卷之二

江戸 蘭洲東 飄著

黨連坊

どうもんちうといえ吉原のいどめき地廻り此多きひをい寛永十九年板本何のま  
 物落ふ元吉原細見記の足繪ふどうもんちうの圖何りともちあききりて長剣  
 をおひつる男海宴の席を妨ぐる侍こそこの町奴今よのあつひあふり 或は長  
 年名おふ哉一登道法師のち事ふとけりなかり猛雨の暮の衰坐をきん吉原  
 小入むのまきをまきぶるのいひあらん余樓をふどうもんちう黨連の文字そ其黨  
 中何のつもりのたあらんあつ坊の字昔の依張ふり 意我あ 登連法師の足張  
 せめき

元禄二年板本吉原流然亭ふどろき 訊来ふあふに事あり没ふるぬ金の出付をど  
 きといふとち又板本の秘史をまぶといふもあふことあり 松永貞治ら油糟ふか  
 山のまぶがやがわね心といふ白何り



悩ふしとありきも来りぬ花桂之く我身まうあはすゆをむて花御  
小通ふとをえあしひし列を後きあむありぬ揚を半は市許よりはとを依  
あふつらき大い驚愕然として暫りて一首の詩を賦せり

他日慕花思春憲攀枝弄色愛尤深氷姿在眼枯無  
跡未免六塵境裡心

かみ早てそもよりをきり信あり石を道沖とよふ小麻の墨染をまひひる念  
珠をわたり遂ふ勝義鏡池のわらふ心月尾と隣り菊をむきひて系頭松風  
小煩惱の夢をさす角田に流水ふ水音の壱をわらひひつゝと他よりあし志  
くれも風流の癖をの勝境陳跡を尋そ其気候を憐れ鏡池の芥ふあつま  
りてその生茂りたるを菱池中小弁天の神社を建まをぬ古墳の何ふ一字の堂を  
之且一口の礎を清そそ路をひ底を自撰し古跡再興の事を法せりそは中つま  
記の神の跡を

烏帽子若ぬ神代もくふ紅葉うか

榮治元年七月廿七日病ふりて身まうぬ享保中彼障を俗僧とよるを解せ  
さるこれをつぐ総泉より後の貫目たしとるを惜むをり  
は総泉ち小字於字は之布及ふ榮氏の墓あり

福聚院

梅垣よりばち小あな東壁の墳墓より服部南郭の私碑銘考ふ詳あれ  
るく小男を以て碑銘の教これあはる

法眼寺

日交あり寒巖馬孟熙の墓より名孟悲字文奎寒巖其号あり碑文  
馬道輝書平陵

勝運寺

千束庄今戸の後より長松寺と隣るく小祖徒先生自書誦字の碑り其女子の  
墓表之又婦人の婢あり其門人南昌勝元啓の文あり

春慶院





先尊の以らるる善く居るといふ神樂の女は、ゆふの古木の根を茂くして仁王川の下の蓬  
池ありまわさうふ塔屋やありこの善く居る母子ふつとて年天の社を神樂を奏せれば  
狐の鈴の音妙ありあふして神樂の衣を唄へば梅木の枝も振ひ蓬池の魚もうの  
み出三谷わらひせき人も惘然とてうねりてれ智志るをさうとて江を船りふ  
るてり又社のある石碑は、待乳のうとてそのうふ田茂睡入る女光とて  
あそびに夕越そりていふるは、待乳のゆふをこころの紫  
其碑 陰る

公翁諱恭光号茂睡本姓戸田氏嘗以 台命為渡辺某所養仍冒其姓官事江府  
有歲矣翁性嗜和歌天和元祿之際告老遊世其學益聞著撰多傳後世稱古調者皆  
以翁為嚆矢焉若其隱家梨下不索橋之号モトガシ皆因其所詠佳句而世人稱之當時  
公翁自立碑於待乳山伸懷一句遺愛予載然而年紀邈焉碑石兩斷恐失其跡豈  
不惆悵乎於是修其古碑以別石雷復之聊誌其大畧永傳其志於後世而已

維時寬政九年丁巳夏五月

姪孫 柳分規貞撰  
門馬永胤書

塵の世をいふ心も積りてハ月のかくき家のひとあそん

洲をすまらるる本郷丸のちゆき谷の移るとき、亂族源光豊といふ人のり  
より

隱家のひともとめは、多の橋のみ、うくつる世と信ちと

かく候ておとちたさふ

我、尾のひともとめは、たの橋のみ、うくつる世と信ちと

あまより不索橋と名付たりとありは、ひととて、茂睡は、此武士あり名利をたもた  
とあり武士の名ありを儒者佛者の上ありとて、武の家あり名利といふありあは、家  
よりきものありあり今、隱遁の才とありて一舟の没ありあきとありて、黄花香菊  
のそとありとも、乃の座して、千金万貫ともありて、それをいふともあそん  
ハ大利と名せめたるありて、大の証あり尾の内つとて、えと大きある、印籠の何  
よりかりありて、甲の籠丸くく、とて、朱ありて、窪田の短冊を、今、控たりとて、  
むき、尾を人の、隱家といひたりれと

人あれぬ方かゆきまればかひもなき隠家  
月をくるとあり

まむも世の隠家のまむも同じぬ秋の月や恨  
まむまむあり

ちりあはぬおのれも今秋のまむもまむもまむも  
上野の花もまむもまむもまむもまむも

花もまむもまむもまむもまむもまむも  
網涼

すまむもまむもまむもまむもまむも  
秋夕

吹砂を風もまむもまむもまむもまむも  
法体

身をくるとまむもまむもまむもまむも  
捨れ捨れ世を

迷懐のころを

暇りの憂いあはれまむもまむもまむも  
覚

思ふも君あつとまむもまむもまむも  
通遙院

まむもまむもまむもまむもまむも  
細道の  
まむもまむもまむもまむもまむも

は浦の八海の想もまむもまむも  
恨絶

今もまむもまむもまむもまむもまむも  
蘭葉のころをまむもまむも

夕日影孤りし友もまむもまむもまむも  
人の進薦のむの字をまむもまむも

昔これまむもまむもまむもまむもまむも  
池のうらまむもまむもまむも

草菴記

我聞大隱隱於市朝粵有戶田氏某者卜居於相左良位  
數十步之外非山非浦所謂隱於市朝者也其菴虽小而  
又獨立於群家多絕景矣遠望山櫻則思荆公之吟近見  
川流則感夫子之言秋月當欄而掛明鏡冬雪粘軒而貫  
白玉迎朝暉送夕陽或徑路緜々持遠之口或溝渠涓々  
為井之了且亦庵主非論道非講書終日白眼點坐箕踞  
有何毀乎有何譽乎主舊居干祿有年年矣故嗜兵器凜  
然不層撓可謂之大夫宜哉隱於市朝也予問曰胡為如  
此乎主莞尔笑曰非魚不知水中樂也吾子夫待為魚之  
曰

悠々あらは虎もつらて 沙草ふおきくも 我を待り 知くべき

此記の園地を身とてわが書しつとそまらるるの 入るうよみておれり 茂睡一

子行はちるとして天和二年壬戌十二月晦 痛ふううむあつてあぬこれを沙草の金  
龍もふまきうよ向野野をさき

風の音草のやしもあめちの 幾えぬるうれむ向ふいし

字那ふのあつてあめち大後 詠まはるふ碑をさき

何れ思ふ昔の秋のそれあつて 眺まはるふ秋をさき

此碑今略之以西乃尾の山杉林の中ふらう茂睡ふ永之年七十七のて身ま  
うそ喜塚金龍もよらう

親善堂

推古天皇此時漢中武成徳成とい漁人沙草川の魚を打つ鯛ふうり 親善のやせうを  
彼三人のおおわらふかりの堂をさき 親善の家根をさき 親善をさき 親善をさき 親善を  
親善堂といひまを今何ん堂といひ 建暦元年ふ 親善道心ふ 親善ふ 親善ふ 親善ふ  
多ね村ふ 親善をさき 居これを 親善堂といひ 今何ん堂といひ 親善のやせうを  
親善堂といひ 今何ん堂といひ 今何ん堂といひ 今何ん堂といひ 今何ん堂といひ



芳名を福の宗廟といふを以ての比喩なり是後宗廟といふゆゑ人の心  
七十年以ては福の宗廟といふと云ふと今二十朝宗廟といふ

久米平内石像

平内武士の浪人を剣術を好むを業とせしを其の流世に傳ふことを  
て存せしむるに己が像を石に刻せしめて觀言地内に建てしあり平内姓を其流に  
久米といふ其名の是れ今久米の平内といふ久米を其姓とせし人多し平内夫婦  
の塚に約して是を鯉繩の大神の海花といふ傳ふなり今此の塚に縁を  
いひ給へけしむるに其像をあらはし

柿本祠碑

龔惟柿本神者人丸之英灵和歌之聖宗石州高角峯播州  
明石浦皆有祠祭祀朝市所景仰古今所嚮應千載昭々德  
輝滋彰矣石川源年恒嗜和歌敬斯神有時近獲灵像是詞  
客墳阿自刻灵像百躰之一也四百年之遇增不堪幸感啓

宇浅草寺新營一祠安斯灵像輝神德於永世建碣銘垂来  
由于不朽云銘曰 南朝老和歌神詞林采矣萬春飛影於  
浅草寺和光干東都人一宇祠一片石德輝灼々麟々  
寛保四年甲子春正月  
琴臺紀恭忠撰

鳳岡関思恭書

琴臺ハ伊藤東涯の門人名ハ恭思字ハ相恕軒拜寄氏一の字ハ蕃臣  
本姓瀬戸東都に住淡州戸田氏の儒臣あり

業平墳

牛嶋の内河川業平の墳あり其の墓の東にありて讀し其の以て今  
中世に入海をすし其の形はひふまふありて其の波風ありて形  
久しき供人少海溺死を業平の墓のひたる所ハ海とありて水不溺ぬらむ  
り故を業平の墓といふ人ありて其の死する人の死骸を求む  
其のつらき業平の墓ありて其の墓にありて其の墓を業平

堀といふを業平村といふ今山根村（堀の橋を業平橋といふ業平村の橋を人の  
いひあらざるあり業平のゆかりを天保といひ業平天保といふ或人の業平の  
事在中將のことといひ上総の由ありといふ名は此傳何れも病の由に攻ませ  
大い戦の軍利を失ひはあそ打北ををる堀をつきこりといふ業平といふとい  
まじり名存記の流る二流を遠よりいさうたうあり

嬉乃森

嬉のまゝ大川端の屋敷あり大木の推あり元禄十四年板本其角、焦尾琴の石  
あのかげのまげといふ人曰くある堀の小家といふといふとてこれを嬉の森  
といふ者あるといふ人あそゆふけ所を咲あれいゆふ首尾より嬉といふ  
名つけあるといふの字の根を首尾の根といふといふ

心中石

心中といふ石あのかとふけ石屋のおある夫婦の石縁をいふをそら屋小間  
あそきといふあそいあそいといふもあらはといふ世人といふ心中といひ

豊後系妻重合かむらふ心中石をいふきく万場の町をいふありといひは  
あり

東江寺

玉島山東江寺、多田薬師のつらふありといふ東江書則の碑は板本とありてせふ  
つら又百里居士松林山人の墳墓あり

百里居士碑

居士姓高野諱勝春字文館号百里江都人以寛文六年丙午十月十二日生享保  
十二年丁未五月十二日病卒享年六十有二葬武州葛飾郡東江寺居士为人恢達自幼  
耽好風流長俳諧體嘗師事芭蕉老人窮其奥老人没復從雪中叟遊前后幾五十年所  
好如海内好事之士知共不知想見其風流莫不欲納款而受其術者而居士常  
疾世唱其術者浮薄乞古不欲与之交生平所友者獨白雲琴風二三子耳以故人  
每能属龍門之望云先卒頃刺恢談自若謂旁侍病惟馨等曰爾輩記之吾  
請以所好終之乃操筆作辞世大笑而逝惟馨等乃謀勒其詞并状一二以追





石より多ししき西田よりけりとも大切の物ありとて大田地より作物とて年々  
米の斗金或分り送る由これも滞り極めの通りの不承とも出束のこあれり  
池に燈籠もあきき池中小致ありとて大吾妻森の地内小茅尾をむきし居り  
内の毎月あふり芝の泉岳寺墓所へ訪てより年若てより石をき田へ送る泉  
岳寺へ引移住居りしとて安永七年二月廿五日九十三歳没を義士墓のわたり  
へ築り碑面小宝山妙海法尼と記あり

義人叢書曰大石氏久々山科の住居して既義士一起とやうりて大石氏をまき  
らんと思へとも永く住居の約束も居りあきき退てハ其行のそのを始地ま  
ても疑り下り中一吉良家より同者居りしこと心もあきき村の地  
方とていざりあをさしそをいさしりて立退り計りこの妻の法を他所  
よりあき居りしとて山科を去りてあき居りしことを地元の法を買切居り  
うけし地より居りあき居りしこと心もあき居りしこと久居住居りし所  
れ候あり不自由のゆゑ居居り安き立退りしことまじくハ懐の郷中一宅居り

殿候より越前藩に召し出され候に大石氏も山科の同輩古き  
知事ありし大石氏は山科の農家のあき居りて居りあき居り吉良家の様子  
を伺ひて義士一同の病付の内互一決りて時夫妻あき居りしとて二人二人  
と移り人知り立退りしとて妙海も山科より雲津を父あき居りし居りしとて

### 大雲寺

本所押上村の浄土宗の寺を猿若代々の菩提所ありし猿若の室物を預りて  
揚子浪人といふものあき居りしとて西川岸の地小茅尾をまき自の  
自分あき居りて大石氏もあき居りて西川岸の地小茅尾をまき自の  
御城へ召されて相ををいりて自并猿若の相の住居東神の御城の如  
若尾宿雲紅線入表のまき立波北月小報告の葉の大紋ひり付りて頂戴を  
同九年安宅丸御船江戸入津の附金の統をありり音頭をとりむ又明暦大寺  
以後安永年中 御城造等の事ゆき会揚りし時又あき居りし猿若の住居東  
をいりて音頭を揚りむ右の如くこの押上村大雲寺も預りて

享保八年癸卯二月中旬芝居開闢より百年此素と名をわけて今の芝居を彼の  
新落意大鼓猿大ふむの如く自負して諸人ふんせ且又右の古装束を医  
者の服を以て薬の上薬のときありはの意のくはりの入るやより衣  
して是も諸人ふんせを素田を述より装束入る馬のの装束をくむ柳の若  
あま大夫助と神并一中のもの麻下下を列坐して古装束を諸人ふんせと大  
谷廣次とい猿の妻細のつけをり述り八市川團十郎後由元あり扱志んあち古鼓の  
子供知りの内ふ助と市嫡子ふんせを團十郎ふんせ扱志んを治ふ扱志ん猿をふ二  
代の中村七之市とい猿の女吉美助と市名代としてこれをつとむ猿の装束の紅  
絃の長ふ扱志ん猿の紅の役は黒絃の素紅絃の妻の神あり柳のよふたぐ丸  
き紅絃の帯をゆめこの端のそく留りたるを右のゆめとくくしりあう猿の扱  
あうゆめを地衣のあうもをいふ大名の装束の濃照柳毛の麻長と市ふふ力掛  
の厨子目あり

扱志んふんせ女舞といひい全く白拍子のこととして志代の大頭あうは芝居三條相倉大

花ふといふ女人水干ふ袴平帯を中啓を以て猿の用ゆる古鼓の頭とるを打  
つけ平家物語等を唱ふうして扇を扱志ん今柳度その以より一變て  
京を舞子江戸を躍ふといひの扱志ん又文福の以出雲ふよりお由と  
いふ女京舞ふ素絃の黒衣黒衣は猿の扱志んをあらし治の層打のそくわをき細二市  
をりつけタキカネ扱志んを扱志んかわけは素帯雲易の世を稱名ふかきこあちりあふ  
これお治躍念仏と唱ひりこふ名猿を猿と名ふといふ武士のふふ回山と市  
いふ男十五才はこれ以備生飛躍も氏郷の高来として天正十九年癸卯九戸  
合戦のとき治城治落の柳舞の扱志ん柳の羽衣を扱志ん扱志んをあらし功名をその治  
ちとあし治人といふ猿の以京大坂の扱志ん又勝を治りふ双の扱志ん扱志んを治  
を以て平日業耀ふくを今いふ山と市と名ふ治志んふふ男お由と市を治  
えり山と市美男風流を治猿樂の能のふれ扱志ん思ひ付てふふ治のあ  
けのふんせ山と市と回山屋治の産扱志んといふ人志んを猿大と  
云今柳扱志んといふお由と市躍念仏のふんせ且又新治の意を古鼓花は躍あ

以上三の美堂小青も尾子流り金泥の紙を縁骨をもり同一紙を梅の造花  
をゆきしけりるあき丸組の筆をかきし唐見抄の出りしを金尾粉色の平  
を敵の指し一尺餘あり友友縁ふ指す敵のしり木葉子ふりのを系  
少背そもの右敵を打せありし敵をそそ右敵を二尺は五寸まう此柄を法書と  
おもひしそのか童用如くを以て身たる今撰ありしの時その名をおまふ  
奴と唱へ豊長太閤朝鮮征伐しして肥前名護屋出陣の留守におくふ年  
少なる浪殿ゆあふおはふ舞姫を撰り沖流ふ入きまこと之をよりおくふ其  
歌あまの系大坂よりしりし風流おまふりまうふま長三年太閤豊死を以  
後時福事撰り寛永元年ふそこのなるあま猿あ江戸ふりし  
しり

墨水消夏録卷之三 目錄

- 一 蝶寺
- 一 蝶傳
- 芭蕉傳
- 大草傳
- 富岡八幡
- 歌仙櫻
- 園女傳
- 倭文子墓
- 真淵傳
- 本八町堀
- 釋迦嶽墳
- 間喜兵衛墓

伊川傳  
 茂左衛門傳  
 東叡山  
 秋色櫻  
 班女塚  
 多官望太郎墓  
 深草元清鐘銘

墨水消夏錄卷之三

一蝶寺并傳

江戸 蘭洲東秋飄著

深川に稻黄龍山宮雲寺を世に蝶寺といふ蝶寺より傳ふ所は暫くはさふ石杉戸に屏  
 風掛物ありと一蝶寺の画ありとあり  
 一蝶寺姓は多賀道元元年攝州より多賀伯尾といふ医師之寛文六年十五歳の時  
 江戸より画を好む狩野安信を以て名に信房といふ刺髪してより漸次と稱  
 を後一家をあせり書を依て本を流し小字に俳諧を嗜む芭蕉を慕ふて一羽草景  
 公羽牛丸院雲蕉草堂隣松尾隣津尾北之志の等稱あり性曠勇あり母  
 ふつて存あり傳より傳りてその画まもる事ありて多賀流といふ元禄六年十二月  
 八日三宅崎へ流るるこの時中根河之丁目村田平左衛門守長自傳氏類三人百人  
 女之船といふ書物一冊中尾抄もいぬべきは諸大名より奥方の無量の苦慮又倉木の  
 好不好をあるを明にせしうよとて珍儀の上とて入幸ありとあり是永六年四月大

教のあひゆせりもふ居るも画と母はつて衣食少く元とあり一蝶母の  
を妙書とて一蝶漏せり後こそ友人横谷宗砥梅物町の宅ふ居り一蝶  
あふことか或時大曲の石灯籠を争ひしものありとてやとてをけり  
を出しておのりもせりて様き庭のうもふうのりもせりも御前を  
のりもせりて生後とてゆのりもせりて喰ひの灯籠ふたをとり  
あふとてりそそぬ高放凡はつとて人を喰ふ所しときつる  
時のをりしをる居るもふ教の船乗りしふこれより一蝶と改を  
し人をそそ又教の画勢もつり

朝清水記

時作

唐土の食泉所和朝清水の路ふ毒水あり近江の磯ふ井園の法  
の清水あり代々の歌人のめりしきそのれりるるるるるるる  
つは路の流のそりれれれれれれれれれれれれれれれれれれ  
これら歌枕もあつてまはるる日れりるるるるるるるるるる

すれ名をよとてゆきまのうらつてきぬれいものありせり  
らひの木森とてれれれれれれれれれれれれれれれれれれ  
もろろの雨の朝の澄溜を志のり便とありるるるるる  
ふのかこき控はふく罪あるを遷さる地をある或中物そ我り  
其の浦の朝あふさるる都の更中路漁推し交り隣りれりる  
たつて朝あふさるる都の更中路漁推し交り隣りれりる  
五村ふ秀て朝の天の富士のそりるるるるるるるるるる  
かかるる東海の天と隠士とてりるるるるるるるるるる  
そりし心そりし心そりし心そりし心そりし心そりし心  
目ふひちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち  
てんを城とてり己ふ夕陽浪ふひひひひひひひひひひひひ  
れがあつてあひてあふふふふふふふふふふふふふふふ  
あつて叫へき山峡後時つ鶴あつてあつて怪松門ふ存り月雪の眺望





やまふ源川ある芭蕉菴山程い甲乙ふゆる途中の冷

多のかけのまふたのかけくゆる程ん  
螺子匂ふらんく

身をこらすののと思ひまはるせう

芭蕉も破を螺舎もなごけうまたるを家のもぢる源川の今日

思ひのこる程なせる世や 一蝶付ふ  
五年九

この 御ひくより 強人な御節

大津源川は僕野角力のあふ

大津源ふ原あん 老の流 是

投吊

侍乳あつんこむおえのこむ今片橋あまの相今に方がりの夕時る首尾を思

へあまの若の細布ご思ひそくそごんたそふりもをまきふ

あの時多良茂紀文あふ自泳ひきあふ入るこむふりもむをむ付り

投吊 一蝶云  
あまゆんて不まのこむふ  
うままの自泳のむも  
かたを干ばもあし中ふか  
あまを今片里出の  
あまを今片里出の  
あまを今片里出の  
あまを今片里出の  
あまを今片里出の

たまをうそひくとねん

画軸の跋

夫大和源ハそのまゝ佐刑部右輔光信がまをふ堂上のうや〜きう田家の

ふつ〜あまの若の細布の〜すまひる 水のめいお〜是ふ時〜末ふ流き〜す〜あ

北地あき〜是ををた〜逆江越あ〜産岩佐の某とあ〜い〜の歌舞白拍子の時イマヤカ

程をおの〜ろ〜む〜世人うき世又々術とあ〜名を〜く〜世の強〜ふ〜

かの菱川源宣と云者江府小出て梓お〜こ〜その風流の目を表げ〜む

お名が〜あ〜ぶ〜と〜も〜あ〜り〜時〜あ〜あ〜の〜ま〜い

あまゆんてのまをゆきけい〜こ〜ま〜は〜い〜岩佐菱川がよ〜ま〜ん〜を〜思ひて

〜あ〜き〜ろ〜き〜あ〜の〜程〜ご〜の〜ら〜て〜ま〜づ〜の〜栞〜の〜あ〜ま〜こ〜ら〜ま〜あ〜ら〜

程が中の事ふ〜り〜て〜端在ふ〜ま〜ら〜〜ら〜十と〜せ〜ふ〜ら〜ら〜れ〜ら〜と〜を〜ふ〜道〜を〜

あ〜ろ〜ま〜の〜あ〜め〜し〜き〜も〜この都ふゆり〜あ〜ねある人若の筆の〜時〜の

を〜れ〜路をゆ〜び〜す〜あ〜る〜心〜を〜く〜〜〜し〜あ〜あ〜ま〜を〜を



千節ふくむるもことたりたり志し今世のつらきふくむるがれき  
後のおどろきをこえんふり神大志をすむに唯あぢきかむ田舎女のさうと強と  
も思ふくくむ當早うつりつりてはアをこる事一浦島く七世のまま  
のなごのたりふひきん且は世をそめるのう路をこれがふ路を  
一蝶場の後宮を重くは経修へ形ふふと七十の齡りしてち児の隣修ふこと  
画以情け大水の耐換くそ好焼夫して今あり一蝶享保九年七十とせし  
墓ハ麻布二牛榎兼壽塔中頭兼院少府碑面ハ英受院一蝶日意と記

芭蕉傳

芭蕉姓ハ松尾名宗方平氏流主衛宗信の苗裔俗名ハ甚七希又名ハ儀左  
母ハ柳池氏字ハありあるまなる忠友ハ次ハ蕉翁あり正保元年甲申伊賀  
松植郷まへる笠倉の物語ハ云々堂和泉公は此後を居者新七郎の料理人  
ありち依物語の面ハ云々ありは好ある人物あり蕉翁ハ云々ハ北村孝  
吟も云々ハ道を學ぶ言ハ云々ハ丙午公の喪ハハ隱居の志ありて志ハハ

辞をまともゆふは因とありあるの如書也一且隣家の傍あり一石を築して七令せり  
書とあり輪とあり及のりありか

それより伊賀の隱居を志す非流志をふくそ延宝八年唐申伊賀を去るは戸ハ  
まゝと同日血あを以て山名川小沢ト入といふもの許ハ唐道ハ刺整して柳書と  
稱を或曰程語時々年三十七歳を源川小むをハ非流を業とし門人杉風を以  
その芭蕉樹をおろしこれを居る稱を芭蕉庵と稱を天和二年に唐延燒  
乃して甲州櫻川谷村のちりふ指ハ貞享元年芭蕉庵再ある笠倉の物語  
小田倉の伊人隠居を九くちりぬき同ハ柳利を出入の秘迹の條を安ん  
尾中倉の二つ河り尾安の柳ふくく柳を有米二外は合わると入す米入あり  
杉風文麟といふ者のそのまも果あくあれハ又入してをそその兼馬道て所  
き時ハ云々へりくともありたれハ自らもあつて由思ふハたつて兼馬つむき  
の八徳のこをまらるる

瓢銘

山口素堂

一瓢重泰山

自喚衿箕山

莫習首陽山

這中飯顛山

顔公のちまゝふたふかゝるもつらとあまうつふきもひもつら  
 我地根ふふも生いりてしより新習もいすもつらと路も死さき  
 字をむき入たき五升もつらとれをくもつらつけ花もつら  
 せんをれもつらとれもつらとれもつらとれもつらとれもつら  
 かゝるもつらとれもつらとれもつらとれもつらとれもつら  
 物ありとかゝるもつらとれもつらとれもつらとれもつら  
 もつらとれもつらとれもつらとれもつらとれもつらとれもつら  
 りもつらとれもつらとれもつらとれもつらとれもつらとれもつら  
 先杜のそつらとれもつらとれもつらとれもつらとれもつら  
 里そ我命をきもつらとれもつらとれもつらとれもつらとれもつら  
 時一壺もつらとれもつらとれもつらとれもつらとれもつらとれもつら

貞享三年草尾まその句

ふる池や塘といこむゝの音

かの句を人の小勝矣と云ふものあり元禄元年杜園を携て吉野より河を舟に  
 年三月廿七日曾良を携て東へ去る程鷹を鳥の細谷といふ書を著せり二年庚午  
 粟はの草尾ふりて乃て七年甲戌暖谷の想ひ吉野より尾柳舎小寓に於十月十日  
 病ありて浪花の定舎小波を年五十一門人其角等これを粟はの茂仲寺  
 へ葬る

芭蕉遺状

- 一 杉風の中へ水は厚志死後とも難忘は厚いふ意ありて其果  
 此暇乞も亦々吾是俳事は流風雅法勉知後法樂こそ歎
- 一 鱗子へ中へ亦々厚意ありて其果此暇乞も亦々吾是俳事は流風雅法勉知後法樂こそ歎

一 嵐をよみよみし門人万子然内嘆息しよん 誰か花好の樂とす  
此の志をうらなひし角ハハ入るる中これ

元禄七年十月

ちや代中

遺物覚

一 之日月日記

伊賀の何り

一 昔の書本

日所

一 埤木

日所

一 新式書入

是ハ杉風くうしそん 後字ホ字本を考ふ  
ふ考もてしん

一 文章及古書

ちハ杉風ふかきし 文章考は 考つた 考捨ん

一 羽州岸中氏の昔の炭徳集を入のつと公館との遠くを

杉風すりの尋新入

一 猿蓑の内江頭句引直

一 古今序傳百人一首の秘決抄 是ハ考へてしん

元禄七年十月

ちや代中

翁の没後ハ文章義仲ちの上の山ふき尾をひき

文章修成ハ内江世々尾江丈の居る 経母つて 考あつた 考を  
其心を耐んとし 考の考を 考は 刀の柄ふきり 考は 考を  
一 判新 一 禅僧とある 考の口號

多年負屋一蝸牛 化做蛤 輪得自由火宅 最惶涎沫盡

偶尋法雨入林丘

涼風よりきりるを 考の やり 考

その考を 仙幻尾と 考を 今 考を 考を 考を 考を 考を 考を  
し 考を 考を 考を 考を 考を 考を 考を 考を 考を 考を

の法華を書寫し經壇ふ築く轉經といふ書を著し道徳を戒この  
人唯此法を以て名を著し其法操に即ち隱居たることを憚む元禄十七年  
二月廿四日其處を没す

芭蕉の家碑源河村中其墓より行つた所の自書其のなき所を以て  
て家めきつる之稿敏士寧文を仰ぐ東江源麟これを古き板本とありて  
世に傳ふたふらふあつたは

富岡八幡

此の一本小云は地江戸をさるれ宮居をりれは多信の人もまれして此の  
野呂走らうはとて此意悲を以て法夜もゆらふれは八幡の社より此の三  
町の内は皆表店ハ多角とありて乃女を重多信の家のあつたこと此物中  
多信より内をい河津の多角といひて十五廿斗の女のこのうち結まらるるを拾入  
まうつと抱まらぬをさるせ少信をさるせとせ三信を引くをさる今ハ此物  
んありり

深川詞

寐悟子

土橋橋下仲町通大鳥居高永代東俠客浴衣親和赤女  
房柳卷本田風豫知一日山開処正是二軒二軒 兼屋金落中三  
十三間堂未建儼然弓矢八幡宮

社前の多石錦江鳴鳳卿の銘あり

歌仙櫻

正徳の頃園女といふ女家通二十六年の桜を八幡乃社内植てこれを歌仙  
桜と稱を今らうれて唯一二本のそめり

園女園西一者とてその妻あり一有は後惟中とぬむ一時新と号を宗  
因の門人とい詠法を嗜医を業とい元禄五年八月十日浪花ふ没を感て園  
女もと臥法のふつありしが伊勢の山田杉中吉多妻とあり風桜を  
員は女ふ學ぶと櫻をふ琴風園女白集路ふ云伊勢を會の何所斯  
波一有妻中詠詠の傳て芭蕉の風ふすぐ詠詠ふ名を今深川の

園女医ハ夫の跡を傳筆にあらうをひ移して今をまをるふ丈夫も  
まうける務むるを志うれも世の心跡く袖の巾の紅糸をきうて少結の  
もあきわくの之を原を二ッ合をいをきんをとおひ十のを九ッ  
と穴のんをく打割にえ居のをを水流しふ用ゆるをけあき業  
と我風移の息あうては後佛ふ入るをを智後といひあう丸めはれま  
んあうを十のゆをう判結やハ唯一のむしを思きたあう十の齡  
句集を著し寛保五年四月廿日没を年七十に深川大岩も塔中ふまの墓  
阿彌世の句を碑面に彫

曙乃 兒ハうづ津の 河海原佛

倭文字

深川有哲まの其墓阿加茂喜淵碑を出たづ子の後京政本といふ  
むそのありそえ伊勢の人北畠家の侍たり後退て飯野郡古泊郷小浜浦を稱せ  
り神倭文字の祖江戸より來り京橋より所小浜浦を卜ををれよりて政本伊勢より

來り近親の思を以て吟女の譜とある吟女の倭文字の母あり京豊豪よりて奴隷  
百ふ四より一女を生むことを倭文字と名づりて女唯容顏の美あうの  
少ゆは幼より書をよむを好む父母もこれを喜と志て加茂吉淵の就  
て學ハしむるむめあはれしを哥を詠文を綴ることを伊香保記といふ冊子  
阿長しそその父母の國あり北村氏の丹康秘をむてこれふめあり元富曆二年  
壬申七月十八日病のかりて没を終ふ臨終一首の歌を詠

人の世ふさきたんしものあうりせの相の一本もつをわたり

加茂真淵

真淵姓加茂縣主國郡博士と名の初三四といふ遠州深根の人あり春告波ハ  
あうい家僕の如くして京師の學ありと年あり學成て江ふありあふ古學を  
唱ふ春告滿ハ茶葉を解て切らうといふもあうその風をよまげるとより詠ふハ  
まをる在滿ハ茶葉の根をききわき開きをくこの感あふ新古今集の  
時ありといふも瀧ふ及びてゆて茶葉の風をよまげり文章もまをる

をまてつり一家をわし世上の耳目を驚かす人ほひ学あふまの美しと後ふ野中  
ハ新塾志のまといまじく極つゝぬ程ふさうと世判らん書由のむら  
まじ川叔果さるふ病ふ伏あどしして朽のまこまがあらまひを道る由ありま  
あ古を若揮しと後世をぶる切少くは明和五年七十二つて没その家  
品川寺海寺地中少林院の取服南郭の墓と隣

本八町堀

本八町堀三丁目八町堀申三の紀伊由屋文左六がすまひあり世ふれを紀文と稱す  
俳諧の名を千山と云そ其角一燈と友たり紀文もと紀伊徳川の産を同々の人  
三人中八百大教人へお古古月せんまき登競とそ二人とこい思をさう江戸の東一  
人に存存五中松谷を其その一人の或か後々多路あり本陣あり紀文ハ少林本陣用  
まそそ八丁堀三丁目ふあすまひは付たそ指定出入せりもの毎り七人づ入居るとれ今の  
此客を中ひきたる多そその名の客を用ひさるあうくく富家とそ昔人を  
花街戯坊の遣ひ紀文たいおんと稱せらる其名をあらさるものあり嘗て京の遊

い揚巻の和泉屋と云内をそそふの叔小粒の豆やましくそせられたる由に伝  
此は品川永代門外小隠店を享保十九年四月甲寅病ふよして没法号を歸  
性融相信士と云り

其角一周忌ふま向の句

馬かうや年を経れとも 流月

風流をたてぬき此花死を惜

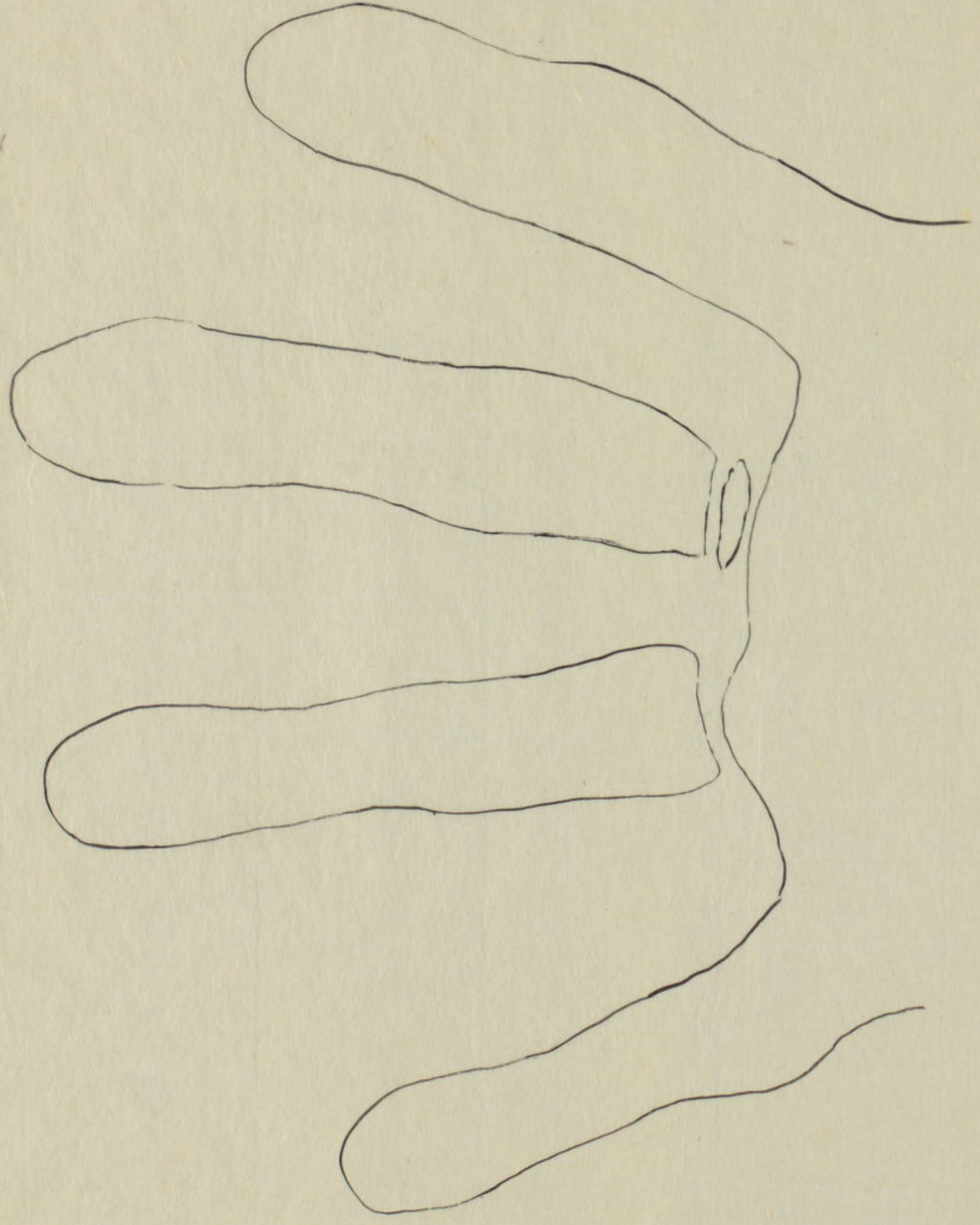
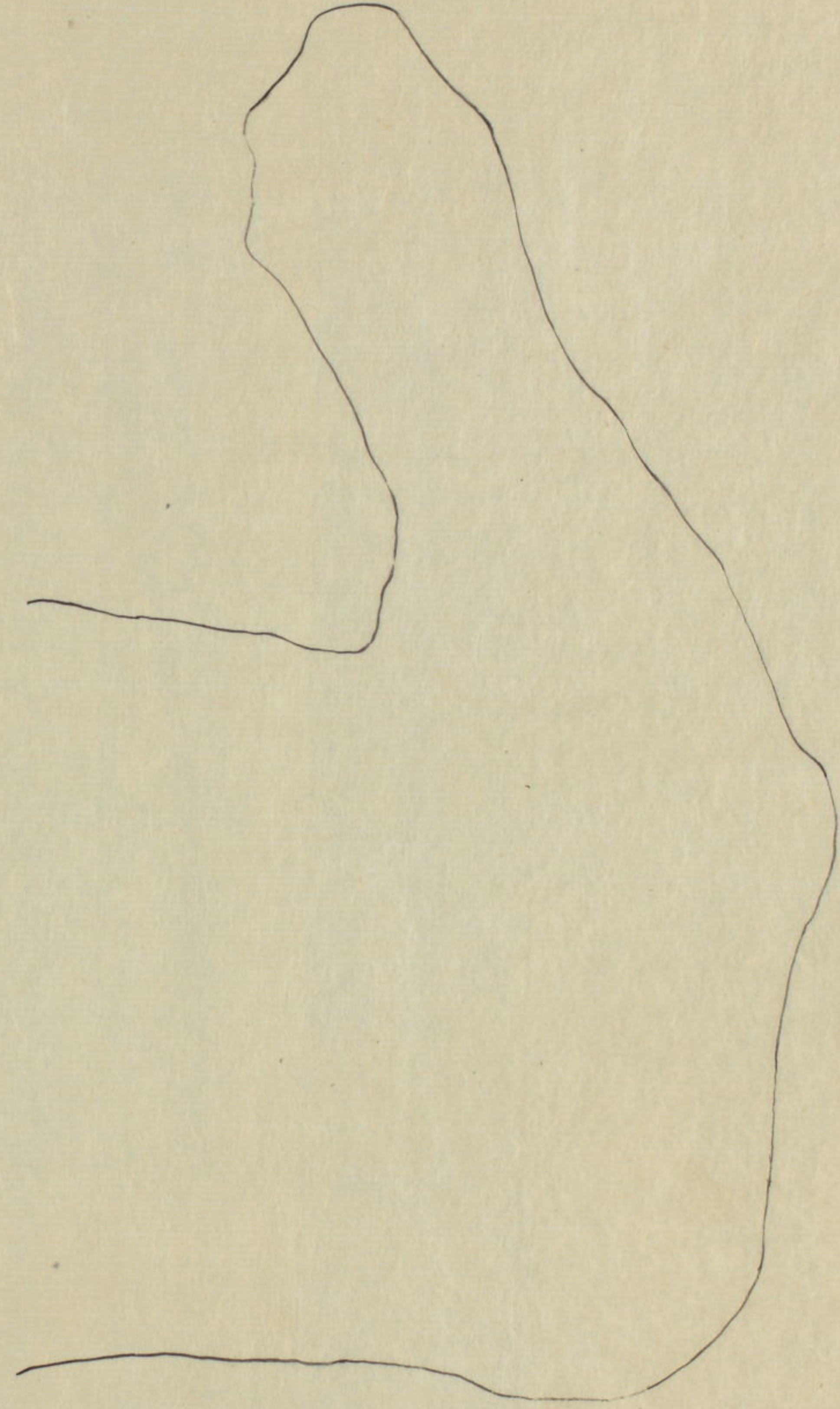
今もいま錦繡の人 よふこころ

二朱判を寄る作音系大屋翁の品川かかまきたる思はけり殿のまじ  
目さんおとんと名そくして竹浜ふた鼓の多色く一燈改題ふ角  
蝶やと云く

釋迦嶽の家

品川八幡社地より釈迦嶽重なる身のため七尺一寸六分雲岬の産  
あり明和の以こは品川大関のあり

釋迦嶽手の形



如道人  
丸山持重なるを在る病  
をれども多あらし凡  
たものを能くをく  
たすものなり  
此の人のをせし紙  
あしふみいさるん  
まのまをわをさるん  
おのれん

全千餘年上人のあひ  
谷風庵を助が自記詩  
を作らるることあり  
ありあり

巨桂何年新初出未  
長白五根暗此中疑  
最高處類有齋天  
聖名  
丸山がこといむる  
とて下り谷風  
の免ゆるり  
此の世の中懐懐の心  
あきりしもの  
の人の心を懐懐を  
こころを懐懐を

右の紙はうらうらをふぬりて紙が切たるあつさるる余の友人  
花の木のあつさるるて裁を古来より角力園に多しと云ふこと  
さふ及そのあつさるる丸山の獄をのふ人守七が丸山持重なる  
空屈林なる六尺一寸五分以上大男の部あれども聖なるふ及ま

間喜名樹墓

此地西野にあり義人叢うを回春を向う姓を伊川と云ふ者  
かりに元禄十六年此十月初之君の御志をつぎし人  
きししそふふあつさるる丸山の中ふ実弓前より身のある  
義の道こそ世ふ名を殊あつさるる武士の樹あらんとおまひ慰の

君のこゝろに心あり武士の命ををく名を殊あつさるる  
かく伊川の流ゆる板四千人の内同光風といふ人  
のこゝろにありし有泉岳といふあつさるるかろろし  
なき魂魄かへりありしものと思ひて

心よりおのれにありあきまのそふもえぬ草のわが

遂に光風とあきまとあつて墓あふま直ゆるむとひふてひふて  
歎あやかへりありあきまのむあつさるるあつさるるあつ

かく吊いさるる志深し思ふも忌と何をも返しせそ二七の泉岳  
世とむふ泉岳の月ありありや入山端ふけりあり

二七日さりの事ありて防ては口古の泉岳  
おとひまやそふををせむてむとり進の人もん

光風を方丈の志や又換惟剣とくといへる所  
まらふあつさるるあつさるるあつさるるあつさるるあつさるる  
まらふあつさるるあつさるるあつさるるあつさるるあつさるる  
悲うらうらををせむてあつさるるあつさるるあつさるる

あつさるるあつさるるあつさるるあつさるるあつさるる  
あつさるるあつさるるあつさるるあつさるるあつさるる  
あつさるるあつさるるあつさるるあつさるるあつさるる





秋色櫻

上野心王法名の後山ありて井戸端ふのそりこれに秋も櫻といふ小畑町桑  
子屋のむらああきといふ所の俳諧をこのころ其角ふあひ秋名と稱す  
十三代とき母ふとていひて花らんふあうふさくらをてりて

井のまゝの櫻あがす酒の酔

ふの夕宮様の内身ふ入て由あけりしとてそれよりこの櫻を秋も櫻と  
稱す後女室迄とありて世ふ用ひらる事係ここの月十九日迄を稱す

んしと女もさめても色のかうり川を

班女塚

志のそけの池のまへ柳原式大輔殿の下屋敷の湯ふり班の衣かけ松といひ  
しゆしきひをばあふらうあり班女といふあふ人や詳あはれ若江戸  
を跳せやりし時松より人の小唄も目黒不動の腰かけ松三田小浜部海苔  
松ね班女衣かけ松送渡りの中松一本松や古松松志ふり何あはれ

つゝいゝ松系越をあも唄いしもそをうかろし在あり

多宮望右衛門墓

上野谷中門御成院の後の屋敷ありを碑半ひりて正徳経蓮少の三字又  
かゝらふ年号を記したるあふ和三月五の字のそりてそかこころに  
けを布ることあふ記録あるはつやひらうあり

深草元政鐘銘

元政十三支を勺の頭ふあそ鐘の銘を作す赤坂の面もなり

- |         |         |
|---------|---------|
| 嵐山流光人未驚 | 牛王出世振梵聲 |
| 虎狼野干氣縱橫 | 兎角方便誘群情 |
| 龍宮高处聲華鯨 | 蛇室睡破覺心生 |
| 馬腹忽變聖胎成 | 羊鹿牛車休復夷 |
| 猿啼霜降月色清 | 鷄人未唱客先行 |
| 狗不夜吠王舍城 | 猪觸金山轉崢嶸 |



墨水消夏錄之三終

